

ファイターズへ入部

ものごころがつかない頃から自転車を漕ぐ父の背につかまり阪急西宮球技場へ。観客席といつても草が生えている土手でバットを追いかけていた。いつしかグラウンドで躍動するブルーのユニフォームに憧れ関西中学に入った。それから10年間、ファイターズでフットボールに打ち込んだ。

大学での4年間

ファイターズは、とことんまでフットボールを追求するチームである。その中でも日々のミーティングを大切にしている。ミーティングでは、仲間やコーチと日々の練習での自分達の動きをきめ細かく確認する。ファイターズの戦術や個人の技術は、この日々のミーティングによって磨かれていく。

それだけではない。「ええ男になれる。」

とは、当時、鳥内監督が常に口にされていた言葉。ファイターズはフットボールを通じて人間性を磨く場である。チームの目標は、常に「日本一」。「ええ男」とは「日本一にふさわしい人間」と置き換えることができる。

ミーティングでは躊躇したプレー、気の抜けたプレー...そんなプレーをした自分を目の当たりにすることになる。プレーは、自分の内面を映す鏡。プレーに入る前に何を意識していたのか、意識していなかったのか、練習に臨むにあたりどんな準備をしたのか、か...自分という人間が露わになる。

プレーを通して自分と向き合い、自分という人間を知る。そこから、自身をどのように活かしていくのか、答えを出していく。そして、試合は勝敗を決する場であり、日々磨いてきた自分という人間を表現する場でもある。

司法試験への挑戦

「ええ男」になるまでの道のりは果てしない。日本一を経験した部員でも監督に胸を張って「ええ男になりました。」と言って卒業する者は数少ないだろう。とことんまで自分と向き合い一所懸命にフットボールに打ち込めば、自分という人間の奥行きというものがおぼろげながらも見えてくる。そうして自分の未熟さを知り、卒業しても社会の場で「ええ男」を追求することになる。

私が司法試験に挑戦したのも「ええ男」を追求するためだったといえる。胸を張って言える事ではないが、私は、学生時代にほとんど勉強していない、弁護士になることなんて考えたこともなかった。ただ、自分と相手を分析し、相手に対応するために必要なスキルはどういったものかを認識し、そのスキルを得るためのプログラムを組み立てるという過程と自分という人間を表現する場をフットボールから司法試験に置き換えただけである。

弁護士としての日々

振り返ってみると、団体競技ではなく、自分をコントロールすることに集中できる点でフットボールのチーム造りよりも司法試験の挑戦の方がシンプルだったと思う。

幸いにも司法試験に合格し、現在、大阪で弁護士をしている。依頼者にとって一生に一度あるかないかの大切な事柄を扱うので、丁寧に事件を処理することを心がけている。

「ええ男」になるまで。



HIROMU TERAKAWA

寺川 拓

「ええ男になれるまで」

寺川拓(てらかわ・ひろむ) / 関西学院中学部1990年3月卒、関西学院高等部1993年3月卒、関西学院大学1997年3月卒(現役時DE、4年時にグッドウィルボウルに出場)、株式会社阪急百貨店に勤務(婦人服担当)1997年4月~2002年3月、関西学院法科大学院2006年3月卒、2008年司法試験合格、2009年12月弁護士登録(大阪弁護士会)

